

別子銅山略年表

天正18年	1590	住友業祖(蘇我理右衛門)京都にて銅製錬、銅細工開業
慶長年間	1600頃	南室吹(銀銅吹分け)を開業
元禄4年	1691	開坑許可(5.9) 採鉱開始(9.22) 製錬開始(12.1) (1690 大露頭発見)
元禄7年	1694	大火災、施設大半焼失
元禄8年	1695	大風雨被害、立川銅山と境界紛争(1697幕府裁定により解決)
元禄15年	1702	経営振興計画を幕府へ具申許可(永代移行他)
宝暦12年	1762	立川銅山を合併(1749から手代名義で請負う)
寛政5年	1793	小足谷疎水坑開さく着手(1804工事難行一時中断)
安政元年	1854	坑内大湧水、幕府操業資金融資
安政2年	1855	休業願出を幕府却下し、資金融資
慶応2年	1866	銅山買請米制度停止示達(1867陳情により復活したが価格上昇のため移働人紛争3ヵ月休山)
明治元年	1868	官軍により一時封鎖、事業継続を新政府へ歎願許可
明治2年	1869	操業新体制発足、小足谷疎水坑掘さく再開(1886完成) 大阪精錬所立川へ移転開始(1876完了)
明治7年	1874	フランス人技師レイ・ラロック雇用、操業近代化に着手
明治9年	1876	東延斜坑開さく着手(1895完成)
明治10年	1877	新居浜御代島築港着手(1879完成)
明治12年	1879	高橋銘鉛炉完成
明治13年	1880	ダイナマイト使用実験成功(わが国鉱業に初めて採用。 尚、黒色火薬使用開始は1870)。高橋排水処理工場建設。
明治16年	1883	別子・新居浜間牛車道完成
明治19年	1886	悠閑に洋式製錬所建設着手(1888完成)
明治21年	1888	第一通洞開通
明治24年	1891	初めてさく岩機使用
明治26年	1893	専用鉄道開通(下部、端出場・悠閑間、5月。上部、 角石原・石ヶ山丈間、12月) 新居浜に煙害問題発生
明治29年	1896	四阪島製錬所建設に着手
明治32年	1899	大水害のため施設大破。
明治35年	1902	第三通洞開通。東平に選鉱所建設
明治38年	1905	四阪島製錬所操業開始、煙害問題発生
明治40年	1907	飯場制度改革に端を発し、全山暴動
大正4年	1915	大立坑、第四通洞開通。
大正5年	1916	採鉱本部を東延から東平に移転
大正8年	1919	銅電解工場完成
大正14年	1925	新居浜浮遊選鉱場完成
昭和4年	1929	四阪島にベテルゼン式硫酸工場新設
昭和5年	1930	採鉱本部を東平から端出場に移転
昭和14年	1939	四阪島製錬所に中工場完成、年来の煙害問題完全解決
昭和21年	1946	別子復興運動始まる
昭和22年	1947	別子労働組合長期ストライキ。坑内大火災
昭和23年	1948	復興起業(下部開発、東立坑開さく他)着手(1955完成)
昭和31年	1956	上部・中部開発起業(上部立坑開さく他)完成
昭和35年	1960	大斜坑開さく着手(1969完成)
昭和40年	1965	地圧現象による山鳴り発生(下部東部地区地表下 1,600m)
昭和44年	1969	東平製錬所建設着手(1971完成)
昭和46年	1971	本山下部坑道で大型シールド採鉱法を採用(切羽延長 100m、200m)
昭和47年	1972	本山坑終掘(地表下2,000m) 山はね現象発生
昭和48年	1973	筏津坑終掘(地表下1,200m)

近郊の史蹟

本記念館は東は大山積神社の神域、西は生子橋を挟んで、東予の名社内宮神社、南は生子山の西隅(通称煙突山、明治年代に設けられていた山根湿式製錬所の煙突が現存している)、北は山根公園を直下に、更に新居浜市の工場群と町並を、一望できる景勝の地にあります。

煙突山の煙突から東方約300メートルの山上が、生子山城址で、ここは天正の昔、豊臣秀吉四国征討の折、勇將松木三河守安村が小早川隆景の猛攻を支えて奮戦した古戦場。また、内宮神社の西方山麓には、曹洞宗の名刹、仏国山瑞応寺の伽藍が、560年の歴史を誇っております。

生子橋より上流は、溪流の美を「別子ライン」と称えられて日本百景の一つ。先ず清流淀む臥竜峡(生子橋附近)より上流へ、ちぎり淵、立川大師堂、臥竜ヶ淵とさかのぼると、南に一橋が見えます。明治年間、別子銅山へ往来する鉱山作業、商人などが、遥か銅山峰を望んで、「行こか、戻ろか、別子の銅山へ、ここが思案の眼鏡橋(鉱山セッター節)と立ち止まったのがこの橋のあたりです。橋の右側の平坦地が立川中宿の跡、また、橋を渡った東側、石ヶ山丈の山懐に羊腸一条の山径が頂上へ延び、これが有名な銅山通いで知られた曾つての牛車道。当記念館の周辺近郊は、かくも史蹟に富んでおります。



開館時間 午前9:00～午後4:00

休館日 毎週月曜日・国民の祝日(祝日が日曜と重なる場合は開館)
年末・年始(12月29日～1月3日)・10月17日

入館料 無料

◆館内案内や団体来館については前もってお申し込み下さい。

別子銅山記念館

〒792-0844 愛媛県新居浜市角野新田町3丁目13番
電話 0897-41-2200 FAX 0897-41-9459

別子銅山記念館案内



別子銅山記念館について

本記念館は、別子銅山の意義を永く後世に伝えるために、住友グループの協力によって建設されました。

別子銅山の歴史は、元禄3年(1690)人跡未踏の銅山峰(海拔1,291メートル)の南側で露頭が発見され、翌4年(1691)から住友によって採掘が開始されたのが始まりであります。

海拔約1,200メートルの地帯から斜めに深く長く帯状に貫入した鉱床は、世界にも稀にみる大鉱床であり、開坑以来、江戸・明治・大正・昭和の4時代282年にわたる長い間、上部から下部に向かって営々と掘りつづけられました。

地下資源の開発に伴う幾多の困難や、水・火による大震災、はたまた時世の変遷による社会経済の変動等によって、幾度か経営の危機にも遭遇しましたが、都度これを克服して、終始住友によって移行が続けられてきました。

しかし、昭和48年(1973)採掘地域が海面下約1,000メートルの地中深部に達するに及んで、地圧の増大と地熱の上昇が著しく、ためにこれ以上の採掘は断念せざるを得ないものと判断され、遂に閉山、その長い歴史を閉じることになったのであります。この間に別子銅山は、本山鉱床、筏津・余慶鉱床から総出鉱量約3,000万トン、その含銅量で72万トン余を産出して、今日みられる住友連系諸事業の礎となつて、その発展に大きな使命を果し、また四国随一の工業都市新居浜市の生成発展に大きく貢献しました。

館内には、別子銅山の歴史をたどる開坑以来の歴史資料や、その間の主な出来事及び生活風俗、技術等に関する史料が展示されています。

■泉屋コーナー

近世初期に銅山師・銅商として台頭した泉屋（住友）の歴史を、江戸時代の絵図、古文書や、明治年代の古文書、図巻、器物、諸記念品等で紹介しております。



棹銅、丁銅、丸銅 江戸時代、銅山の荒銅（粗銅）を大阪の銅吹所（精錬所）で精銅にし、長崎貿易用と、国内販売用のものをつくりました。

棹銅 貿易用で御用銅ともいいます。

丁銅・丸銅 国内販売用で地産銅とも呼ばれました。

■歴史コーナー

元禄3年大露頭発見、翌4年開坑より閉山までの別子銅山経営の推移を、古文書、絵図、図録図表、器物、模型等で、特に明治以降は写真類を豊富に使用して紹介しております。

また室の中央に大露頭、筏津鉱床鉱脈全巾鉱石や別子銅山坑道模型、住友グループ各社発展略図、明治中期の別子銅山模型があります。



鑛石を採る図（坑内採掘作業）江戸末期刊行の鼓銅図録により螺灯の明りで鉱石を掘っているところ、道具は鑛と鑿です。

■地質・鉱床コーナー

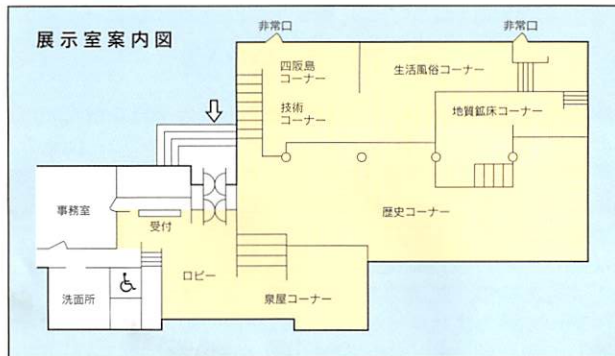
別子銅山や周辺の地質・鉱床のあらまし、鉱石標本等を紹介しております。



黄銅鉱

主に硫化銅からなる、銅品位の高い鉱石です。

鉱脈尖滅点 鋭く尖がり切れている鉱脈消滅の状態です。



■展示品のあらまし

当館のロビー正面に大鉈、次いで泉屋、歴史、地質・鉱床、生活・風俗、技術、四阪島の6コーナーには、古文書、絵図、図表、器物、写真、模型等を展示し、屋外展示場には車輛等の資料を展示しております。

■ロビー



大鉈 定められた寸法に刻み上げられた鉱石を、飾り臺で結束し、古式により毎年元旦、銅山守護神大山積神社に奉献しておりました。これは昭和48年(1973)に奉献された別子銅山最後のもので、鉱石の重さは約300キログラムあります。

■屋外展示場

鉱山専用鉄道用機関車と、かご電車他3点を展示紹介しております。

別子1号蒸気機関車

鉱山専用鉄道(明治26年1893開通)用として、ドイツ、クラウス会社より購入した、別子での第1号蒸気機関車で、走行当時は珍しいので、見物人が押しかけたといわれます。



■生活・風俗コーナー

江戸末期より昭和年代に至る、山内作業・風俗や、坑内用諸道具類、諸行事、服装、諸施設等を紹介しております。



銅山札

山銀札 金額を表示した別子銅山山内限り通用の紙製金券で、明治2年(1869)～同6年(1873)まで使われました。

歩役札 紙幣に類似のため廃止となった山銀札の代わりに、労働量を表示した木製金券で、明治6年(1873)～同9年(1876)まで使われました。

■技術コーナー

採鉱法・支柱法・大立坑模型や、明治より昭和に至る照明器具、採鉱用小道具、鉄道用品、鉱山救護隊用品、さく岩機他を紹介しております。



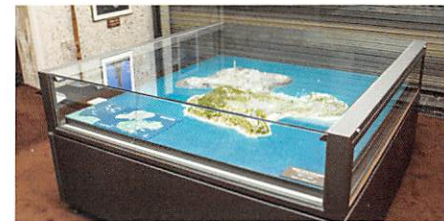
照明器具

螺灯 明治28年(1895)頃まで使用、栄螺の殻に鯨油を入れ、灯芯に点火して坑内作業の明りとしました。

鉄製種油灯・ブリキ製種油灯 明治28年(1895)～大正2年(1913)まで使われました。

■四阪島コーナー

銅製鍊による煙害克服の歴史を持つ四阪島模型、海底ケーブル、大煙突避雷針等を展示紹介しております。



四阪島模型

昭和50年(1975)頃の様子を1000分の1のスケールで表わしています。

別子銅山の歴史概要

別子銅山記念館（永井）

1. 別子銅山概要

1) 歴史概要

- ・元禄 3 年(1690)6 月 切上り長兵衛（立川銅山廻切夫）、吉岡銅山支配人の田向重右衛門に大露頭発見通報（同年 9 月現地確認）
- ・元禄 3 年 10 月 幕府へ請負稼行出願（運上金で保留）
- ・元禄 4 年 4 月 請負稼行再願
- ・元禄 4 年(1691)5 月 9 日 幕府より請負稼行認可（5 年間）
- ・元禄 4 年 9 月 採掘開始（歓喜・歓東坑）
- ・元禄 7 年(1694)4 月 25 日 大火災発生（支配人の杉本助七以下 132 名殉職）
- ・元禄 15 年 3 月 永代稼行・買請米認可（安米制度：S5 年の 230 年継続）
 - *元禄 10 年頃 日本の産銅量世界一、内泉屋が 1 / 4 占める
- ・宝暦 12 年(1762)4 月 立川銅山併合（寛延 2 年(1749) 手代名義で請負）
- ・開坑 150 年頃(1840)頃から幕末頃にかけて、「遠町深舗」深刻化（経営悪化要因）
- ・慶応 4 年(1868 年)1 月 大阪本店銅蔵、薩摩藩により封鎖（2 月解除）
 - 2 月 別子銅山、土佐藩により差押え（1）
- ・同年 3 月 広瀬幸平、川田小一郎等の尽力により、暫定的に稼行継続許可（明治 5 年 7 月 永続許可）〔国家の大計に反する〕
広瀬、経営危機に伴う本店重役による別子銅山売却計画（10 万円）を「血涙を注いで反対し」阻止
- ・明治 23 年(1890)5 月 別子開坑 200 年（M33.7 別子産銅により楠木正成銅像献納）
- ・明治 26 年(1893)9 月 亜硫酸ガスによる煙害問題発生（2）→四阪島への移転
- ・明治 32 年(1899)8 月 28 日 別子大水害（死者 513 名、倒壊家屋 122 戸）
 - 11 月別子鉱業所本部新居浜移転（全製錬設備も移転）
- ・明治 38 年(1905)1 月 四阪製錬所操業開始（M30.2 建設着手）→煙害拡大
- ・大正 5 年(1916)1 月 採鉱本部を東延（旧別子地区）から東平に移転
- ・昭和 5 年(1930)5 月 採鉱本部を東平から端出場に移転
- ・昭和 14 年(1939)7 月 四阪に中和工場完成、12 月煙害問題完全解決（発生から 47 年）
- ・昭和 15 年(1940)5 月 新居浜にて別子開坑 250 年祭挙行
- ・昭和 48 年(1973)3 月 閉山（筏津坑終掘、本山坑は前年 9 月終掘）。
283 年にわたり稼行←安全（山鳴り・山はね）・作業環境等の問題により

2) 特 徴〔別子銅山本山坑採鉱図〕

- ・(本山鉱床) 傾斜角: 北東 45 度~70 度 厚さ: 50cm~8m (平均 2.5m) 幅: 1,500m
長さ: 2,300m 以上 (海拔 1,300m~海面下 1,000m 以上) の含銅硫化鉄鉱床 (キースラーガー: 黄銅鉱・黄鉄鉱) で、鉄と硫黄の含有率が高い。
- ・(全山) 出鉱量: 推定約 3,000 万トン 産銅量: 約 65 万トン 平均品位: 約 2.5%
坑道総延長: 約 700km
- ・住友による一貫経営

2. 住友の(銅)事業の始まり

1) 初代当主: 住友政友 (法号: 文殊院) (1585~1653 年 68 歳没)

- ・天正 13 年(1585 年) 越前・丸岡 (福井県坂井市丸岡町) 生まれ、12 歳で上洛。
- ・涅槃宗に皈依するも天台宗への吸収を潔しとせず還俗
- ・45 歳頃「富士屋 (嘉休)」の屋号で、薬種販売 (万病薬: 反魂丹) と書籍出版開業。
- ・晩年 (慶安 3 年: 1650 年頃) に、店員の勘十郎に商売の心得や人としての生き方を示した書状を書き記す。後に「文殊院旨意書」と称する家訓となる。

2) 南蛮吹き of 祖: 蘇我理右衛門 (1572~1636 年)

- ・元龜 3 年(1572 年) 大阪・河内五条 (東大阪市) 生まれで、政友の姉婿。
- ・天正 18 年 (1590 年←別子銅山発見の 100 年前) 19 歳で上洛し、「泉屋」の屋号で銅吹き (精錬) と銅細工の事業起こす。←住友の (銅) 事業の始まり
- ・慶長年間(1596 年~1615 年)に「南蛮吹き」を開発←銀の国外流出防止
 - * 南蛮吹き: 鉛を使って銀と銅を吹き分ける技術
- ・本能寺の変 (天正 10 年) 江戸幕府開府 (慶長 8 年) 大阪冬の陣 (慶長 19 年)
- ・南蛮吹きは独占せず、技術公開 (別子産銅鉱石は当初除き使用せず: 間吹きもの)

3) 屋号「泉屋」と社章「菱井桁」の由来

- ・「泉屋」の由来は、①南蛮吹きを伝授してもらった南蛮人の名が「白水」? ②理右衛門の先祖の出身地が泉州で深い関係があった③信仰していた京都の五条天神が夢枕に立ち「子孫の繁栄を願うならセンという字をつけよ」の示現を得た等諸説あり。何れにしても泉は清らかな水が滾々と湧き出る、また、泉貨 (貨幣) にも通じることから決まったと思われる。
- ・社章「菱井桁」は、屋号の泉や井戸から着想されたものと考えられる。
前年の商標条例公布により、明治 18 年商標登録

4) 泉屋 (住友) 事業の拡大

- ・第 2 代当主友以 (とももち。慶長 12 年(1607)生まれ。理右衛門の長男で政友の娘婿、泉屋住友を開業) が 17 歳 (元和 9 年: 1623 年) のとき、事業 (銅吹所) を京都から大阪 (内淡路町) に移転。その後、長堀 (鰻谷) に大規模な銅吹所を設け事業拡大

3. 住友の事業（別子銅山）の発展を支えた人々（館内紹介者を中心に）

1) 広瀬幸平（後の初代総理事、号は「遠図」）（1828～1914年 87歳没）

- ・ 文政 11 年(1828)5 月 近江・野洲郡八夫村（滋賀県野洲市中主町）生まれ
- ・ 慶応元年(1865)9 月 別子銅山支配人（37 歳、第 35 代）←11 歳から銅山勤務
- ・ M10 年(1877)2 月 総理代人（50 歳）←所有（資本）と経営の分離（実質的）
- ・ M22 年(1889)5～11 月 還暦記念で欧米視察（製鉄や鉄道の重要性痛感）
- ・ M27 年(1894)11 月 総理人辞職（67 歳）

* 「別子の申し子」、「別子中興の元勲」、「東の渋沢 西の広瀬」

* 別子銅山近代化推進

- ・ M7(1874).1 フランス人技師：ルイ・ラロック雇用（3 月別子入り）
- ・ M8(1875).11 ラロック 別子銅山近代化プラン「別子鉱山目論見書」作成
- ・ M9(1876).2 別子近代化起業方針示す

①採鉱作業の近代化

東延斜坑(M9 着工→M28 完成)、ダイナマイト(M15)、削岩機(M24)・・・

②輸送の近代化

牛車道(M13 完成)、第一通銅(M19 貫通)、上部鉄道(M26.3 角石原－石ヶ山丈間 5.5km、日本最初の山岳鉱山鉄道)、自動式複式索道(M26.8 石ヶ山丈一端出場間 1.6km)、下部鉄道(M26.8 端出場－惣開 10.5km)・・・

③製錬設備の近代化

高橋洋式製錬所(M12)、惣開製錬所(M21)、山根製錬所(M21 竣工)、湿式収銅（沈殿銅）・硫酸・製鉄試験実施→M28 煙害と技術・採算上の問題で閉鎖）・・・

- * 座右の銘等
 - ・ 明治 12 年 大阪鰻谷の住友本邸に銅橋設置→現在は有芳園（事業は石橋を渡るがごとく、慎重・確実を旨とすべし）
 - ・ 「逆命利君、謂之忠」（命に逆らっても君を利す、これを忠という）

2) 伊庭貞剛（2 代目総理事、号は「幽翁」）（広瀬の甥 1847～1926 年 80 歳没）

- ・ 弘化 4 年(1847)1 月 近江・蒲生郡西宿村（滋賀県近江八幡市西宿）の生まれ
- ・ M12 年(1879)2 月 大阪上等裁判所判事辞し、住友入社（33 歳）
- ・ M26 年(1893)9 月 惣開・山根製錬所からの亜硫酸ガスによる煙害問題発生
- ・ M27 年(1894)7 月 別子鉱山支配人（48 歳）
- ・ M28 年(1895)5 月 尾道支店にて第一回重役会議
 - ・ 海外貿易拡張、本店移転新築・M28.11 住友銀行・M30.4 住友伸銅場創設・M31.5 山林課設置・M32.7 住友倉庫設立
- ・ M33 年(1900)1 月 2 代目総理事就任（54 歳）
- ・ M37 年(1904)7 月 総理事辞職（58 歳）←信念（事業の進歩発展に最も害するのは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である）

* 「CSR の先駆者」 (四阪移転決断・報恩植林・坑水路建設)

* 事業方針等 「公利公益」

(住友の事業は、住友自身を利するとともに、国家を利し、かつ社会を利する底の事業でなければならない)

* 座右の銘 「君子財を愛す、これを取るに道あり」 (禅宗「宗門無尽燈論」)

(利益追求は恥じることではないが、手段が大事＝人の道を外すな)

3) 鈴木馬左也 (3代目総理事) (1861～1922年 62歳没)

- ・ 文久元年(1861)2月 宮崎・高鍋 (宮崎県高鍋町) 生まれ (高鍋藩家老四男)
- ・ M29年(1896)5月 農商務省参事官辞し、住友入社 (36歳)
- ・ M32年(1899)1月 別子鉱業所支配人 (39歳)
- ・ M32年(1899).8.28 別子大水害発生 (死者 513名) ←本部・製錬設備新居浜移転
- ・ M37年(1904)7月 3代目総理事就任 (44歳)
- ・ M38年(1905)1月 四阪製錬所竣工 本格操業開始
- ・ T10年(1921)2月 住友総本店を住友合資会社 (資本金 1.5億円) に改組
- ・ M42年(1909)4月 尾道会議 (煙害協議)
- ・ T11年(1922).12月 総理事辞職 (62歳)

* 植林事業全国拡大、諸事業拡大

- ・ M44.8 住友電線製造所設立 (住友電工の前身)、T2.9 住友肥料製造所開設 (住友化学の前身)、T4.12 住友鑄鋼所開設 (旧住友金属の前身)、T6.11 扶桑海上火災 (株) 出資 (旧住友海上火災保険の前身)、T7.11 日米板硝子出資 (日本板硝子の前身)、T8.2 土佐吉野川水力電気 (株) (住友共同電力の前身)、T8.12 大阪北港 (株) (住友商事の前身)

* 事業方針等 ・「自利利他 公私一如」 (=公利公益)

・「事業は人なり」 一有為な人材の積極的採用・育成

(4代目総理事中田錦吉、5代目湯川寛吉、6代目小倉正恆、川田 順、鷺尾勘解治、7代目総理事古田俊之助)

4) 鷺尾勘解治 (住友別子鉱山 (株) 常務取締役＝最高責任者) (1881～1981年)

- ・ M14年(1881)5月 兵庫・須磨村 (神戸市須磨区) 生まれ
- ・ T15年(1926)4月 別子鉱業所支配人 (44歳)
- ・ S2年(1927)10月 住友別子鉱山 (株) 常務取締役 (46歳)
- ・ S4年(1929)10月 世界大恐慌発生 (S2.3 金融恐慌)、各種不況対策実施
- ・ S8年(1933)12月 依願退職 (51歳) S56.4 新居浜の地で逝去 (99歳)

* 共存共栄、末期の経営と地方後援策

機械事業育成 (住友重機械工業: M21.11 惣開製錬所工作係として創業)、化学事業拡大、新居浜築港 (S14.6 完成)、工業用地造成、昭和通り建設 (S6.7 完成) 等

以上

別子銅山記念館（永井）

【文殊院旨意書（家訓）】

初代政友が晩年(1650 年頃)に、店員の勘十郎に商売の心得や人としての生き方を書き記した書状（正直・慎重・確実を重んじること）。後に、「文殊院旨意書」と称する家訓となる。

商事は 不及言候へ共 万事情（精）に可被入候

（商売は言うまでもないが、まず人間としてすべてに誠心誠意、心を込めて行うように）

1. 何にても 常の相場より安き物持来候共 根本を知らぬものに候はば

少も買い申間敷候 左様の物は盗物（とうもつ）と可心得候

（いかなる理由があろうと、普通の相場より安い品物を持ってきたら、それは物事の本質を知らない品物なので、少しも買ってはならない。そのような品物は盗品と心得よ）

1. 何たる者にも一夜の宿も貸し申し 又編笠にても預かるまじく候

（どのような人であっても、知らない人を宿泊させてはならない。また、編笠ぐらいと思って、軽々しく他人の物を預かってはならない）

1. 人の口合いせらるまじく候

（他人の保証人になってはいけない）

1. 掛商せらるまじく候

（現金取引でない掛け商いをしてはならない）

1. 人何やうの事申候共 気短かく言葉荒く申まじく候 何様重て具（つぶさ）に可申候

（顧客がたとえ無理難題を言ってきたとしても、短気に乱暴な言葉づかいで応対してはならない。相手が分かるまで懇切丁寧に説明すべきである）

【住友家法】

明治 15 年 3 月、文殊院旨意書等を基に初代総理事（総理代人）広瀬宰平編纂。

家憲（家長の職責規定）と家法（事業運営方法規定）で構成。

* 住友家憲（住友家法第一款）

我住友家長タル者ハ誓テ左ノ条件ヲ履行シ 家業ノ隆盛ヲ図ルヲ以テ必要トス

第一条 政令ヲ遵奉シ 家則ヲ確守シ 品行ヲ謹ミ 本分ヲ尽ス事

第二条 予州別子山ノ鉱業ハ万世不朽ノ財本ニシテ 斯業（シギョウ：この事業）

ノ盛衰ハ我一家ノ興廃ニ関シ 重且大ナル他ニ比スベキモノナシ 故ニ旧

来ノ事蹟ニ徴シテ（照らし合わせる）将来ノ便益ヲ謀リ 益々盛大ナラシ

ムル事

（別子鉱山の事業は、永遠に滅びない財産・資本であり、この事業の成否は実に

住友家の盛衰に関係するので、ぜひとも旧来行ってきた事業のやり方になら
て、将来の利便を考え、ますます盛大になるようにすること)

第三条 我営業ハ確實ヲ旨トシ 時勢ノ変遷理財ノ得失ヲ計リテ之ヲ興廃シ 苟ク
モ浮利ニ趨リ輕進ス可ラザル事

第四条 祖先ノ祭祀ヲ厚クシ子孫ノ教育ヲ怠ル可ラザル事 (以下第五条～七条略)
→「コンプライアンス」、「人材育成」(事業は人なり)・・・

【住友合資会社社則】(大正 10 年 2 月 住友総本店(個人商店)を住友合資会社に改組)
明治 24 年 11 月改正「住友家法」(家憲と家法に分割、「所有と経営の分離」明確化
＝家長は君臨すれど統治せず)所収の営業ノ要旨を昭和 3 年 7 月改正(「予州別子山
ノ鉱業ハ我一家累代ノ財本ニシテ」云々条文削除。5 代目総理事 湯川寛吉)。

住友各社の経営理念(事業精神)として継承。

* 営業ノ要旨

第一条 我住友ノ営業ハ信用ヲ重ンシ 確實ヲ旨トシ 以テ其ノ鞏固(キョウコ)
隆盛ヲ期スヘシ

(わが住友の営業は、信用を重んじ確實を根本理念とし、これにより事業の確実
な発展を図っていかなければならない)

第二条 我住友ノ営業ハ時勢ノ変遷理財ノ得失ヲ計リ 弛張(シチョウ)興廃スルコ
トアルヘシト雖モ苟(イヤシク)モ浮利ニ趨(ハシ)リ輕進スヘカラス

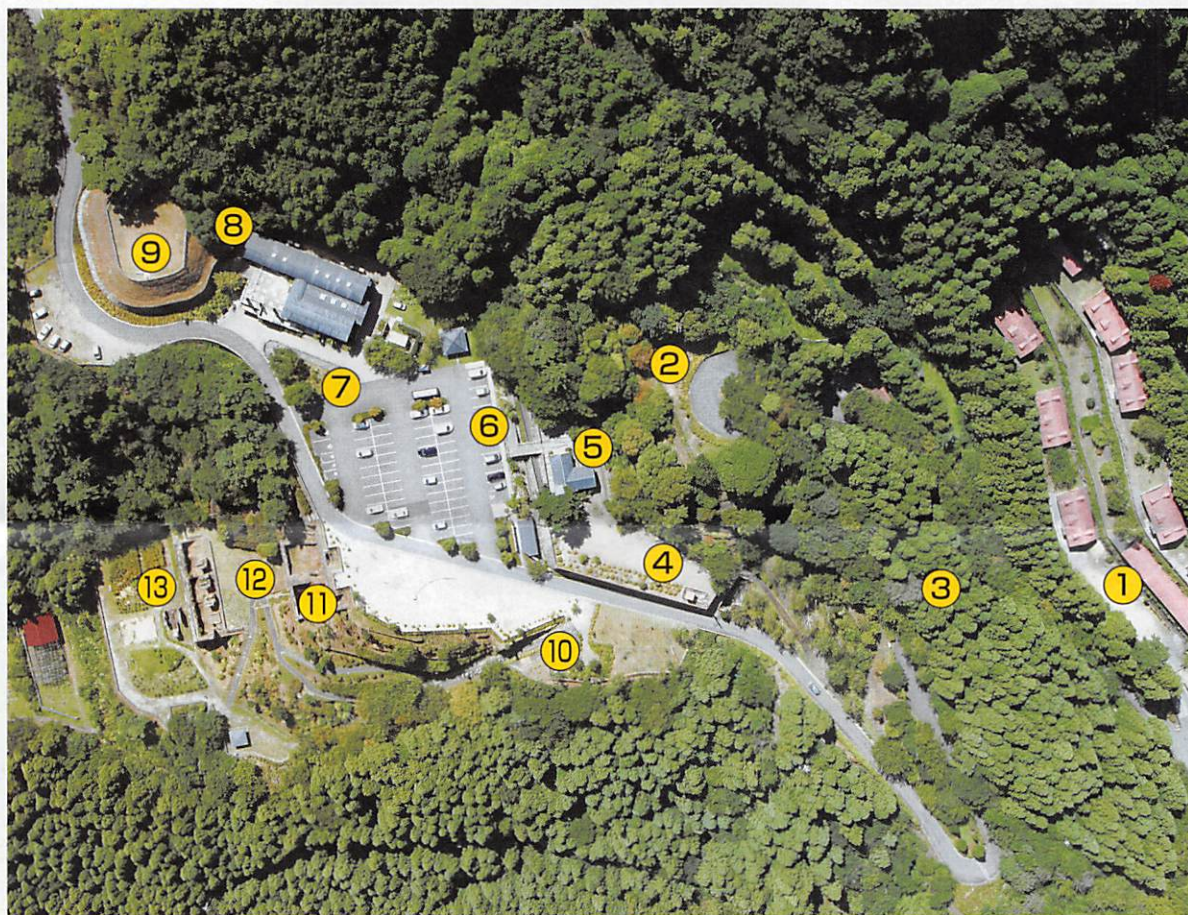
(わが住友の営業は、時代の移り変わり、財貨運用の損得を考えて、事業を拡張
したり縮小したり、新しく興したり廃止したりするのであるが、いやしくも目
先の利益に走り、十分な調査・検討をせず軽々しく進めてはいけない)

以上

東平（とうなる）は、標高750m前後の山中に位置し、赤石山系の自然を借景とした自然環境に恵まれたところです。大正5年（1916）から昭和5年（1930）まで別子銅山（べっしどうざん）の採鉱本部が置かれるなど、東平地域には銅山関連施設や生活関連施設が整備され、最盛期には約5,000人も銅山関係者とその家族が住み、昭和43年（1968）の東平坑休止によって無人の地となるまで、山の町として賑わっていました。

東平は、端出場（はでば）ゾーンに続くマイントピア別子第2期事業として開発し、平成6年6月2日にマイントピア別子・東平ゾーンとしてオープンしました。学校、病院、娯楽場、社宅などがあつた往時の東平の様子を伝える歴史資料館、産業遺産を活用したマイン工房のほか、花木園などを整備しています。また、東平小学校・中学校の跡地には、宿泊研修施設の「銅山の里自然の家」も整備され、多くの方に利用されています。

● マイントピア別子・東平ゾーン主要施設の航空写真（上：南、下：北、左：東、右：西）



● 航空写真（上）とマイントピア別子・東平ゾーンの施設との位置関係

番号	過去の施設名	現在の施設名
①	東平小学校・東平中学校	銅山の里自然の家
②	東平荘（東平接待館）	—
③	東平社宅	園地・通路
④	採鉱本部（東平集落）	—
⑤	保安本部	東平マイン工房
⑥	プラットホーム（電車乗り場）	駐車場
⑦	電車庫、機械・木工作所	駐車場・東平歴史資料館
⑧	小マンプ（トンネル）	東平にゆかりのある鉱山運搬機器展示場
⑨	プール	展望広場
⑩	インクライン	長大階段

番号	過去の施設名	現在の施設名
⑪	東平貯鉱庫	遺構の一部現存
⑫	東平選鉱場	花木園
⑬	東平索道停車場	遺構の一部現存

銅山の里自然の家（東平小学校・中学校跡地に建つ）



※ このマイントピア別子・東平ゾーンの案内紙の両面に使用している写真の転用は禁止します。

● 東

年号	西暦	
明治20年	1887	第二通洞
明治22年	1889	第二通洞
明治26年	1893	別子鉱山
明治27年	1894	第三通洞
明治28年	1895	東平にペ
明治35年	1902	第三通洞
明治37年	1904	東平第三
		複式索道
		第三通洞
明治38年	1905	東平選鉱
		東平収銅
		第三通洞
		住友病院
明治39年	1906	私立東平
明治41年	1908	東平郵便
明治44年	1911	日浦通洞貫
		別子鉱山
明治45年	1912	東平娯楽
		採鉱本部
大正5年	1916	東平浮遊
		自彊舎を
大正9年	1920	東平粉鉱
大正11年	1922	東平粒鉱
大正15年	1926	東平比重
		東平収銅
昭和3年	1928	住友病院
		東平選鉱
昭和5年	1930	採鉱本部
		東黒索道を
昭和10年	1935	単式索道
昭和13年	1938	かご電車
昭和22年	1947	学制改革
昭和36年	1961	別子学園
昭和43年	1968	東平坑終
昭和47年	1972	かご電車

とうなる びの里 東平

マイントピア別子・東平ゾーン

平の歴史 ●

東平での主な出来事
(旧第三通洞) 開さく着手
(旧第三通洞) 開さく中止
鉄道上部線(上部鉄道)に一本松停車場設置 の開さく着手
ルトン水車設置(第三通洞開さく用)
貫通(東平坑口～東延斜坑:延長1,795m)
変電所設置 (東黒索道)完成(東平～黒石)
に電車導入
場完成
所完成
～東平～端出場～新居浜間の坑水路完成
東平出張所開設
尋常高等小学校開校
局開局
通(日浦～東延斜坑底:延長2,120m) 第三通洞と連絡
鉄道上部線(上部鉄道)廃止
場設置
を東延から東平(第三集落)へ移転
選鉱試験工場完成
旧別子から東平へ移転
選鉱場(比重選鉱)完成
選鉱場(比重選鉱)完成
選鉱設備を新居浜選鉱場へ移転
所廃止
東平出張所が分院となる
場廃止
を東平(東平集落)から端出場へ移転
短縮し、東端索道とする(東平～端出場:2,717m)
(太東索道)完成(太平坑～東平:1,373m)
運転開始(東平～日浦)一般利用にも提供
により私立井華東平中学校開校
(東平小学校・東平中学校)公立移管
掘 東平撤退
廃止

● 施設のご案内 ●

施設名称	項 目	内 容			
東平記念館 (東平歴史資料館・東平マイン工房)	開 館 時 間	午前10時～午後5時			
	休 館 日	毎週月曜日(月曜日が休日の場合は、その翌日) 12月1日から翌年の2月末日まで			
	入 場 料	無 料(マイン工房での銅板レリーフ等の体験料は別途)			
	所 在 地	〒792-0846 愛媛県新居浜市立川町654-3			
	電話(問い合わせ)	東平記念館 (0897)36-1300			
銅山の里自然の家 (教育施設)	使 用 料 金	区 分	1 日	1泊2日	1日増すごとの追加
		小・中学生、随行の教諭	310円	630円	310円
		高校生以上	520円	1,050円	520円
	使用料には、食事代は含まれません。食事代は別途。				
	休 所 日	毎週月曜日(月曜日が休日の場合は、その翌日) 12月1日から翌年の2月末日まで			
	所 在 地	〒792-0846 愛媛県新居浜市立川町654-3			
	電話(問い合わせ)	銅山の里自然の家 (0897)32-1300			

※使用料金は変更される場合があります。

● 遠登志(おとし)から東平までの航空写真(上:南、下:北、左:東、右:西)



● 航空写真(上)との位置関係

番号	過去の施設名	現在の施設名
①	大マンブ(トンネル)	現 存
②	東平火薬庫	現 存
③	東平第三変電所	建屋の遺構が現存
④	第三通洞	現 存
⑤	落シ橋	鉄製アーチ部分が現存(現在の橋名は遠登志橋)

東平歴史資料館



鉱山の町として賑わった東平の往時の生活文化や銅及び別子銅山等を紹介しています。

● 東平記念館への距離と時間 ●



東平マイン工房(旧保安本部建屋を活用)



銅板レリーフなどを遊びこころで体験し、手づくりの楽しさを味わうことができます。

マイントピア別子・東平ゾーンと遠登志

東平小学校・中学校跡

東平小学校は、明治39年(1906)に私立住友東平尋常高等小学校として開校しています。中学校は、昭和22年(1947)に私立井華東平中学校として開校しています。(財閥解体により、当時、校名にも「住友」の名称が使用できませんでした。)

小・中学校とも昭和36年(1961)に公立に移管され、新居浜市立東平小学校・東平中学校となり、昭和43年(1968)の東平坑休止に伴い、学校は閉校しました。現在、学校跡地に銅山の里自然の家が建っています。



在りし日の東平小学校



在りし日の東平中学校

一の森と大山積神社跡

一の森は、標高832.6mの東平のシンボルとなる山です。山頂は地形(おぎょう)によりグラウンドとして整備され、東平地域の集落対抗の運動会や学校の運動会などに使用されていました。

また、一の森には、大正4年(1915)に別子山の目出度町(めったまち)から遷宮されてきた別子銅山鎮護の神を祀る大山積神社の社殿もありました。

現在、大山積神社跡には石灯籠の一部などが残されています。



太東索道から一の森を望む



銅山の里自然の家から一の森を望む

社宅跡

東平地域には柳谷、唐谷(からたに)、一本松、第三、喜三谷(きぞうたに)、辻坂(すべりざか)、東平、呉木、尾端(おぼな)の集落があり、その住居のほとんどが社宅でした。大正末期には約900戸あり約5,000人もの人々が住んでいました。

現在、マイントピア別子(東平ゾーン)内では、東平集落、辻坂集落、第三集落の跡を見ることができます。建屋は全て撤去されていますが、辻坂集落跡には炊事場の遺構などがあります。



一本松社宅跡(手前)と東平社宅(中央)



東平社宅(上段は上東平、下段は下東平)

東平荘跡

東平荘は、立派な建築で銅山の要人や賓客を接待し、山系を借景とし、敷地内の中庭が整備されていました。ここには、土井晩翠や常務理事、山口鶴子(元山口鶴子)など著名人も宿泊していました。

現在、東平荘跡地は更地となっています。



要人の滞在に使用し



現在は更地となっ

東平貯鉱庫跡

東平地域を代表する産業遺産のひとつに、重厚な花崗岩造りの貯鉱庫があります。関連施設である東平選鉱場や東平と黒石を結ぶ東黒索道が、明治38年(1905)に完成していることから、この貯鉱庫は、これらとほぼ同時期に建設されたと思われます。

この貯鉱庫は、第三通洞経由で運ばれてきた鉱石と、新太平坑(しんたいへいこう)と東平を結ぶ太東索道から運ばれてきた鉱石を、一時的に貯蔵するものでした。



明治後期の東平貯鉱庫(中央左下)



重厚な花崗岩造りである東平貯鉱庫の遺構

東平索道停車場跡

東平索道停車場は、鉱山施設が集中していた東平集落の下部にあり、東平と端出場(黒石)を結ぶ主要輸送機関でした。

鉱石運搬はもちろん、日常生活品や郵便物、新聞もこの索道で輸送されていました。鉱石は、隣接する貯鉱庫から搬器に移され、端出場へと運ばれていました。

現在、赤レンガ造りの東平索道停車場の遺構があります。



稼働中の東平索道停車場



貯鉱庫下にある東平索道停車場の遺構

小マンブ・大マンブ

東平の電車乗り場から第三通洞へ向けて2つのトンネルがあります。東平集落にある短いトンネルを小マンブ、喜三谷から第三に向けてある長いトンネルを大マンブと呼んでいました。マンブとは坑道を意味する間符(まぶ)から転じたものとされています。

現在、小マンブの中は、東平にゆかりのある鉱山運搬機器展示場となっています。



電車が走っていた小マンブ



東平ゆかりの運搬機器類を展示した小マンブ

旧東平第三

明治37年(1904)に完成した第三変電所は、落し水力発電の電圧調整と明治38年(1905)に完成した第三通洞の電車が導入されたことに伴って設置された。

現在、かつて採鉱本部が第三の地形のやや上段に設置された変電所の建屋が残されており、変電所であった面影はほ



東平坑休止頃の



赤レンガ造りの旧

(落シ)の別子銅山産業・文化遺産紹介

発行：新居浜市経済部運輸観光課

協力・写真提供：別子銅山記念館

接待館跡

接待館跡は、別子銅山から送電された電力を使用して建設され、別子山行上の中継となる事務所は銅山峰の南、いわゆる旧別子と呼ばれる地域に置かれていましたが、大正5年(1916)に初めて銅山峰の北側に位置する東平の第三に採鉱本部が移ってきました。その後、東平の採鉱本部は、第三集落から現在のメイン工房(旧保安本部)の西側の東平集落へと移転してきました。現在は、更地となっています。



接待館跡 (東平荘)



接待館跡 (東平荘)

採鉱本部(東平集落)跡

元禄4年(1691)5月9日の別子開坑以来、別子銅山稼行上の中継となる事務所は銅山峰の南、いわゆる旧別子と呼ばれる地域に置かれていましたが、大正5年(1916)に初めて銅山峰の北側に位置する東平の第三に採鉱本部が移ってきました。その後、東平の採鉱本部は、第三集落から現在のメイン工房(旧保安本部)の西側の東平集落へと移転してきました。現在は、更地となっています。



東平集落にあった頃の採鉱本部



東平集落の採鉱本部跡 (東平は霧が多い)

旧保安本部

現在、東平記念館のメイン工房として利用されている赤レンガ造りの建屋は、明治期は配電所、大正期は林業課事務所、その後は保安本部として活用されていました。建設時期は、落し水力発電所、東平第三変電所が明治37年(1904)の完成であることから、それと同時期ではないかと思われます。メイン工房(旧保安本部建屋)から現在の駐車場へと続くコンクリート造りのL字型階段が残されていますが、この下には、第三通洞、日浦通洞を走っていた電車のホームがありました。



東平の電車乗り場(下)と保安本部(上)



メイン工房として再生された旧保安本部建屋

旧インクライン

端出場(はでば)から索道で東平へと運ばれてきた物資は、インクライン(傾斜面を走る軌道)を通じて荷揚げされていました。現在、インクラインはマイントピア別子東平ゾーンの園内遊歩道の一部、220段の長大階段に生まれ代わっています。



端出場からの物資輸送に使用されたインクライン



220段の長大階段となったインクライン

第三変電所

成した赤レンガ造りの電所から送電されてきた年(1905)に第三通洞に伴い、その電車用に直流水路もとされています。平嶺北側に初めて置かれた、赤レンガ造りの旧第三変電所ですが、建屋の中は、ほとんどありません。



東平第三変電所



東平第三変電所建屋

採鉱本部(第三集落)跡と旧東平火薬庫

寛永谷川と柳谷川が合流して流れる足谷川に暗渠を築き、地形(ちぎょう)されたところに、東平最初の採鉱本部が置かれていました。第三の地形の片隅に、アーチ型の旧火薬庫の入口が斜めに見えます。不測の事態が発生しても、爆風が人や施設に影響を与えないように考慮されていたのでしょう。この火薬庫は、明治45年(1912)に採鉱を目的に開削された坑道を活用したもので、坑道掘削用のダイナマイトなどを保管していました。この火薬庫の通風口は寛永谷にありました。



第三集落にあった頃の採鉱本部



寛永谷へと延びている旧東平火薬庫口

第三通洞

第三通洞は、標高747mの東平坑口から8番坑道準の東延斜坑底を結ぶ延長1,795m、幅3.35m、高さ3.73mの主要運搬坑道で、明治35年(1902)に貫通しています。明治44年(1911)には、同年貫通した日浦通洞と連絡し、端出場水力発電所への導水路も併設されていました。明治38年(1905)には電車が導入され、昭和13年(1938)からは東平と日浦を結ぶ「かご電車」(1両当たり最大8人乗り)が運転を開始し、一般利用にも提供されていました。



別子銅山近代化に貢献した第三通洞



東平を代表する遺構の第三通洞

遠登志橋(落シ橋)

落シ橋(おとしはし)【現在の橋名は遠登志橋(おとしはし)】は、別子鉱業所土木課が明治38年(1905)、総工費4,198円20銭をかけて足谷川に建設した延長48.25mの鉄製アーチ橋です。この橋は、更に高地にある東平や別子山を往來する生活道として利用されていました。また、第三通洞からの坑内排水を新居浜へと導水する坑水路も併設されていました。遠登志橋は、平成17年(2005)に国の登録有形文化財となっています。



落シ橋には、かつて坑水路が併設されていた



国の登録有形文化財となった遠登志橋



日本の近代産業を 育成した広瀬幸平

(国指定重要文化財 旧広瀬家住宅)

新居浜市 広瀬 歴史記念館

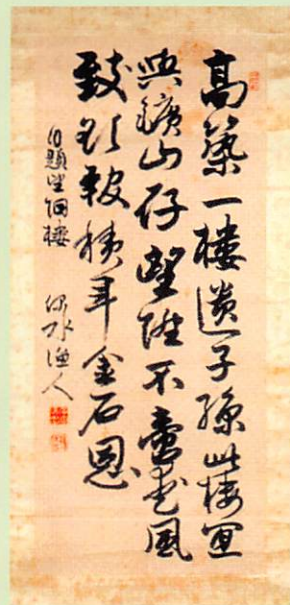
【記念館の概要】

幕末・明治の動乱期に、政府による接収や住友の経営難による売却から別子銅山をまもり、その開発の近代化を推進した広瀬幸平。彼はまた、わが国の産業の育成にも力を注ぎ国家の発展に貢献しました。

この記念館は、幸平の足跡を通して新居浜の生い立ちと日本の近代産業の歩みをたどる施設です。

展示館

展示室入口にある現代の望煙楼と称した象徴空間では、南北に赤石連峰と麓灘の眺望を満喫することができます。そして、別子鉱山鉄道の切通を再現したジオラマを抜けると、幸平の人生がいくつかのテーマ毎に映像や実物資料、パネルを用いて紹介されています。叔父に伴われ9歳にして初めて別子銅山に赴いて以来、その経営維持に奔走し、採鉱・製錬や陸運の近代化を推進するなど、わが国殖産興業に尽力した幸平の姿がここにあります。



望煙楼の軸

旧広瀬邸 (国指定重要文化財 旧広瀬家住宅)

母屋は明治10年建築、明治20年に現在地に移築、新座敷と庭園は明治22年に建築・造園され、母屋二階の望煙楼からは、新居浜市を一望することができます。邸宅は伝統的な日本建築様式を持ちながらも開国により西洋から輸入されたマントルピース、洋式便器、板ガラス、避雷針といった新しい文化が取り入れられており、そのふたつが見事に調和しています。そこに、西洋の進んだ技術により別子銅山を近代化した広瀬幸平の「遠大なる計画」と「進取の気性」の思いを垣間見ることができます。

旧広瀬邸は、「別子銅山を支えた実業家の先駆的な近代和風住宅」として、平成15年5月、国の重要文化財に指定されました。

ひろ せ さい へい
【広瀬幸平】

(生没年) 文政11年(1828)5月5日～
大正3年(1914)1月31日

(実名) 満忠
(雅号) 保水・遠図・幸翁
(幼名) 駒之助
(通称) 治助・新右衛門・義右衛門・幸平

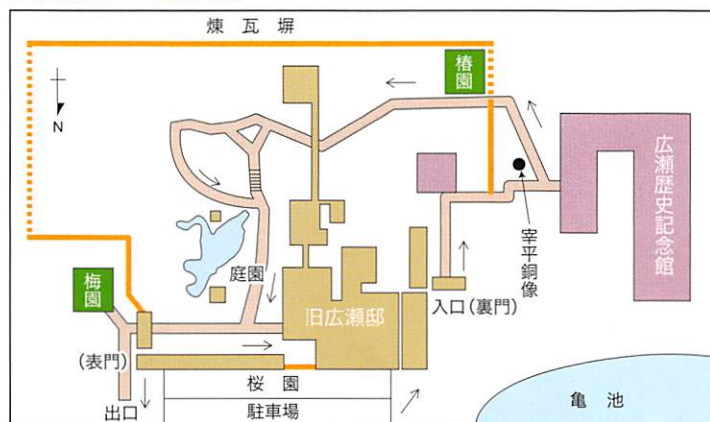


(62歳・欧米巡遊中)

【略年譜】

- | | | |
|----------------|-----|---|
| 文政11
(1828) | 1歳 | 近江国(滋賀県)の医者北脇理三郎の次男として誕生 |
| 天保7
(1836) | 9歳 | 叔父に伴われ、別子銅山に赴き、2年後勤務 |
| 安政2
(1855) | 28歳 | 広瀬義右衛門の夫婦養子となる |
| 安政6
(1859) | 32歳 | 長男満正生まれる |
| 慶応元
(1865) | 38歳 | 別子銅山支配人に就任 |
| 明治元
(1868) | 41歳 | 別子銅山差し押さえの危機を回避する
鉱山司職員として生野鉱山に出仕、同4年再出仕 |
| 明治2
(1869) | 42歳 | 自家田畑を抵当に山銀札を発行 |
| 明治4
(1871) | 44歳 | 神戸に製銅販売の出店設置 |
| 明治5
(1872) | 45歳 | イギリス人から蒸気船白水丸を購入 |
| 明治7
(1874) | 47歳 | フランスの鉱山技師ラロックを雇い入れる |
| 明治9
(1876) | 49歳 | 別子銅山近代化起業方針を示す |
| 明治10
(1877) | 50歳 | 住友家総理代人(後の総理事)となる |
| 明治11
(1878) | 51歳 | 大阪商法会議所・大阪株式取引所の設立発起人となる |
| 明治14
(1881) | 54歳 | 関西貿易社・大阪製銅会社の設立発起人となる |
| 明治15
(1882) | 55歳 | 住友家法を制定 |
| 明治17
(1884) | 57歳 | 大阪商船会社を設立、初代頭取となる |
| 明治20
(1887) | 60歳 | 住友近江製糸場を設立し、神戸支店で製茶の輸出開始 |
| 明治21
(1888) | 61歳 | 新居浜惣開製錬所・山根製錬所操業 |
| 明治22
(1889) | 62歳 | 幸夫人とともに欧米を巡遊、神戸に樟脳製造所を開設 |
| 明治23
(1890) | 63歳 | 山根製錬所に製鉄係設置 |
| 明治24
(1891) | 64歳 | 別子銅山鉄道敷設に着手、同26年竣工 |
| 明治25
(1892) | 65歳 | 民間人として初めて明治勲章を受勲 |
| 明治27
(1894) | 67歳 | 住友家を依願退職、3年後、須磨に隠棲 |
| 大正3
(1914) | | 死去、享年87 |

【施設のご案内】



【ご利用案内】

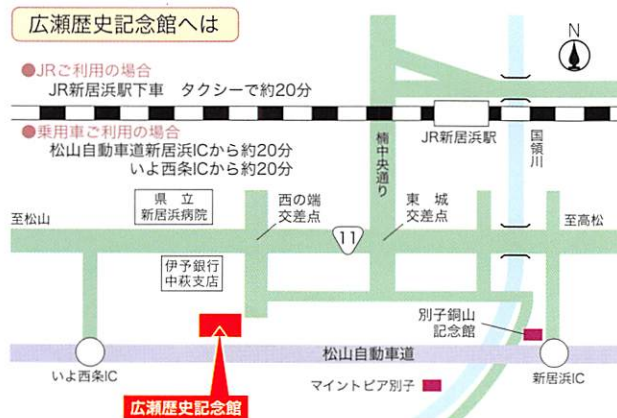
観覧料	個人	520円(中学生以下無料)
	団体	420円(20名以上)

※ 身体障がい者手帳や療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳の交付を受けている人及びその介護者1名が、身体障がい者手帳などを提示した場合と、市内在住の65歳以上の人が、住所と年齢がわかる書類を提示した場合は、半額(260円)

開館時間 9:30～17:30(受付時間は17:00まで)

休館日 月曜日
国民の祝日の翌日(日曜日を除く)
12月29日から1月3日まで

注意 文化財保護のため、喫煙・飲食はご遠慮下さい。また、他の入館者の迷惑になる行為はしないで下さい。



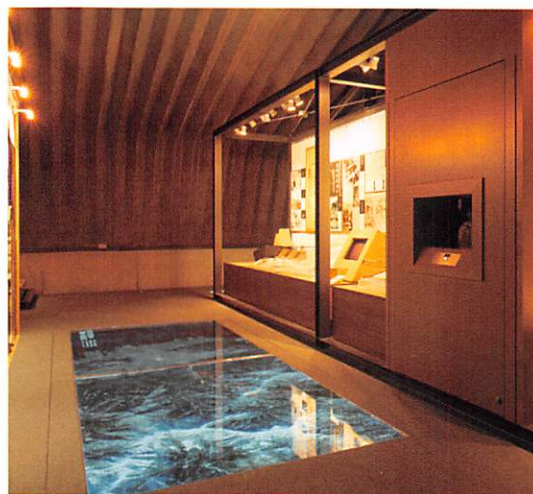
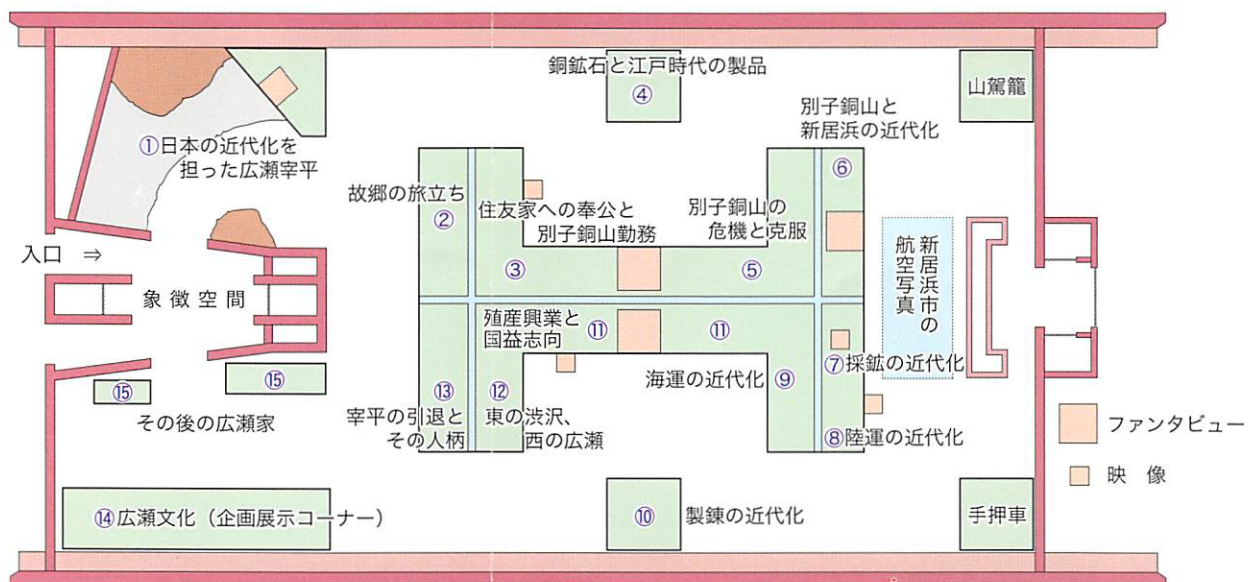
連絡先

792-0046 愛媛県新居浜市上原2丁目10番42号
新居浜市広瀬歴史記念館
TEL (0897) 40-6333 FAX (0897) 40-6334

展示室



現代の望煙楼と称した象徴空間からは、南北に配した鏡を利用して赤石連峰と燧灘を一望できます。

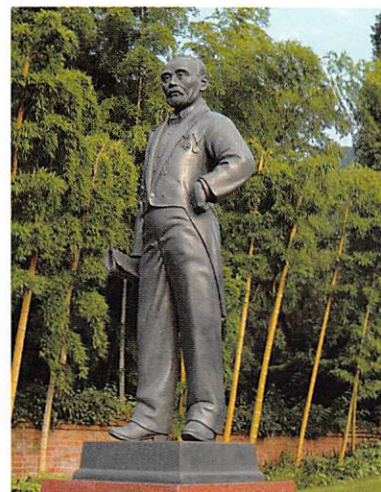


航空写真とファンタビュー

床面に新居浜市の航空写真があり、昔の牛車道や鉄道跡をみることができます。そのすぐ横には古文書を解説する装置（ファンタビュー）があります。

広瀬幸平銅像

明治31年、幸平の古希記念として住友家から贈られました。昭和18年、戦時供出されましたが、平成15年春、高村光雲の木型を用いて東京芸術大学の手で復元されました。



旧広瀬邸



内庭

新座敷内部

宰平翁は「望煙楼」と名付けた母屋二階から瀬戸内海に面した住友の工場や蒸気船を眺めながら、新居浜の発展を見守っていたといわれます。

別子開坑200年祭（明治23年）の「接待館」として建てられた新座敷は、住友出入りの大工棟梁・八木甚兵衛の手になるものです。



母屋玄関



二階望煙楼



※注意 色の建物の内部は、管理上の都合により見学することができません。

(旧邸写真撮影：小野吉彦)

旧 広 瀬 邸



内庭より母屋(右)と新座敷(左)を望む(小野吉彦氏撮影)

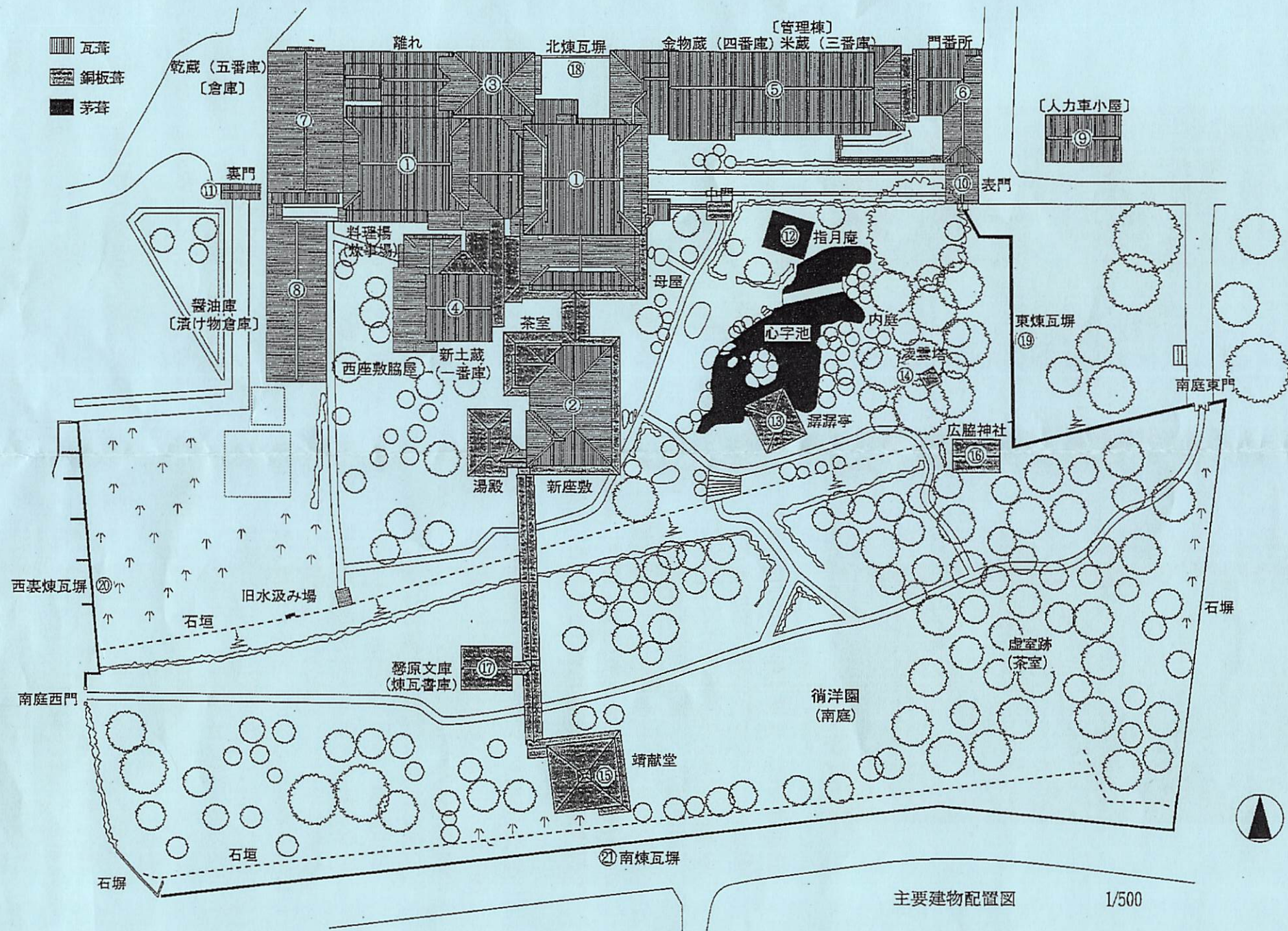
新居浜市は、元禄4年(1691)に開坑した別子銅山が育んだ町であり、明治以降の銅山の近代化によって急速な発展を遂げた。昭和48年(1973)鉱山は閉山したが、別子の山々には100年前の植林により緑がもどり、新居浜には鉱山から派生した産業によって工場が林立し、瀬戸内海工業地帯の一翼を担っている。この旧別子から新居浜、さらに瀬戸内海上の四阪島にかけての地域には多くの別子銅山関連の産業遺産が残り、わが国の産業革命が果たした役割を雄弁に物語っている。これらの近代化産業遺産は、住友家初代総理人・広瀬幸平(ひろせさいへい)によって創生されたものである。

広瀬公園は、別子銅山の近代化によりわが国の近代産業を育成し、住友グループの基礎を確立した広瀬幸平の旧邸・庭園を公園としたものである。昭和43年(1968)、広瀬公園は愛媛県の指定名勝となり、平成9年(1997)にオープンした広瀬歴史記念館とともに現在は市民の憩いの場となっている。

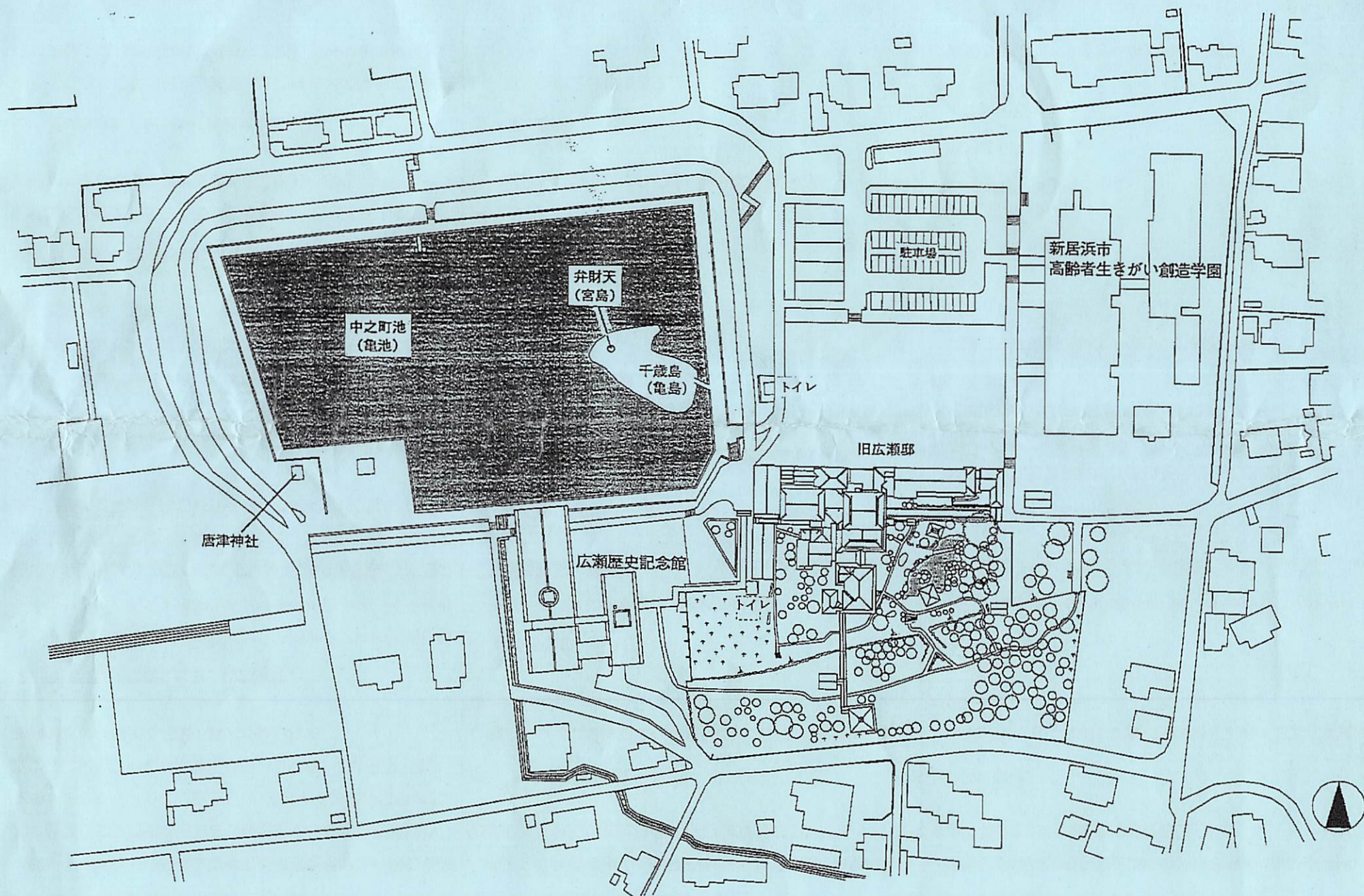
旧広瀬邸の母屋は、明治10年(1877)、現在の場所から北に4キロメートルほど離れた旧金子村の久保田で竣工したが、同18年からの広瀬邸の移転に伴い、乾蔵・米蔵などと共に現在地に移築された。明治22年には附属の新座敷と庭園が大阪の棟梁 八木甚兵衛(やぎじんべい)と植木屋清兵衛の手によって竣工した。その後、大正・昭和初期にかけて南庭や中之町池(亀池)周辺の整備が行われ、今日みる姿となった。

この旧広瀬邸は、平成15年5月、「別子銅山を支えた実業家の先駆的な近代和風住宅」として国の重要文化財に指定された。指定にあたっての主な評価点は、次のようなものである。

- ① 敷地内の建築がほぼすべて残り、改造もほとんどなく、明治中期の大規模和風住宅の姿を今日に伝える遺構として貴重である。
- ② 母屋及び新座敷はいずれも数奇屋風の意匠を凝らした上質なつくりで、眺望を意識した部屋を複数持つなど住宅機能のみに留まらず、迎賓館の役割を兼ね備えた構成も特徴的であり、高い価値がある。



おもや ① 母屋（重要文化財、内部公開） 明治10年に市内久保田に建てた母屋を明治20年に現在地に移築した。西側に明治33年頃増築の料理場を設ける。2階「望煙楼（ぼうえんろう）」の名は幸平の漢詩にちなむ。北と東の縁手すりに洋風意匠を用いるほか、洋式便器・暖炉・避雷針など実用面で洋風の導入が見られる。 しんざしき ② 新座敷（重要文化財、内部公開） 別子開坑200年祭の接待館として明治22年に建築された。住友入りの大工棟梁八木甚兵衛の手による。15畳敷きの「新座敷」、10畳の「次の間」、北西の「茶室」、南西の廊下を介して「湯殿・雪隠」を設ける。新座敷には上段風の床と琵琶床を備え、内法長押を廻して欄間・釘隠等に意匠を凝らしている。 はな ③ 離れ（重要文化財） 明治22年に移築された。1階は釜屋・風呂場などが附属し、2階は縁と床を備える「指翠楼（しすいろう）」や隠し部屋などがある。 しんどそう にしざしきわきや つけたり ④ 新土蔵・西座敷脇屋（附 指定） 明治21年の竣工であるが、昭和初期に大規模な改修工事が行われた。西座敷は戦後西条市に移築された。 かなものぐら こめぐら ⑤ 金物蔵・米蔵（重要文化財） 明治20年に久保田より移築。江戸時代末の建築で、米蔵には天保10年の祈祷札が残されている。一部を事務所として使用。	もんばんしょ ⑥ 門番所（重要文化財） 明治23年頃の建築。久保田時代の「御部屋」（幸平の養母の部屋）を移築したとの伝承もあるが、詳細は不明。 いぬいぐら ⑦ 乾蔵（重要文化財） 明治20年に久保田より移築したもの。江戸時代末期の建築と思われる。 しょうゆぐら ⑧ 醤油庫 昭和6年、久保田から移築された納屋跡に建築された。邸内で最も新しい建築。 じんりきしゃこや つけたり ⑨ 人力車小屋（附 指定） 明治30年代以前の建築。 おもてもん ⑩ 表門（重要文化財） 明治23年頃の建築。 うらもん つけたり ⑪ 裏門（附 指定） 明治23年以前の建築。 しげつあん ⑫ 指月庵 明治21年頃の竣工の茶室。命名は遠藤石山。 せんせんてい ⑬ 潺潺亭 東屋。明治23年頃竣工。	りょうんとう ⑭ 凌雲塔 明治20年竣工の銅製三重の塔。別子銅山の銅を使用して大阪で製作された。銘文は遠藤石山。 せいけんどう ⑮ 靖献堂 広瀬家持仏堂。大正11年に外郭竣工、同13年に開同式が行われた。 ひろわきじんじゃ ⑯ 広脇神社 大正5年建築。もとは亀池南西岸の唐津神社に合祀されていた。 れんがしよこ けいげんぶんこ ⑰ 煉瓦書庫（馨原文庫） 大正12年に外郭竣工。読書を奨励した広瀬満正（幸平長男）が、地方人士の知識開発のために建てたものといわれる。 きたれんがべい ⑱ 北煉瓦塀 明治23年以前の竣工。透かしの意匠を持つ。 ひがしれんがべい ⑲ 東煉瓦塀 明治23年頃竣工。 にしうられんがべい ⑳ 西裏煉瓦塀 明治24年頃竣工。 みなみれんがべい ㉑ 南煉瓦塀 大正5年竣工。108m余の長さがある。
---	--	--



も見送りを断念して、足を温めるために帰宅せざるをえませんでした。そのことを詫び、広瀬夫妻の無事の帰国を指折り待っていますと書かれてあり、新島の誠意が伝わってきます。宰平の帰国は、半年後の十一月十六日。新島が亡くなるのは、それから二か月後の、明治二十三年一月二十三日のことです。

(広瀬歴史記念館)

※当館に展示中の「広瀬宰平宛、新島襄書状」(明治二十二年五月六日)の全文は次の通りです。

一昨日は、是非とも京都ステーションに於て、一応之拝眉も得度存居候處、其朝、敝校之卒業生等力、私共を招き、校内ニ而共ニ写真を取度旨申参り候付、構内之草原ニ立、写影ニ取懸申候處、折悪雨降来、已ニ人数も殆相満候ニ付、雨降来而も再解散すへからすと、一同漸時雨ニ湿たる草場に立候ハ、靴をぬらし候故、直ニ帰宅仕、足を暖め申為ニ、ステーション迄参上之義ハ、不得止見合に致し候、何ニ候とも、不本意千万、乍去、賢台ニも御存通、病臥差少之事力身体に障り申候間、不参之事ハ、不惡御承引被下度候、来年ハ、御両所様共、無恙御帰朝被遊候を、屈指奉待上候、右は為御暇乞、得貴意度、艸々敬具

五月六日

新島襄 拝

広瀬宰平

賢台机下

新島八重が語る広瀬宰平

「八重の桜」の主人公、新島八重が、広瀬宰平と知り合っていたことをご存知ですか？

八重の夫である新島襄と宰平は、同志社大学設立運動の募金活動を通じて、交流がありました。当館に展示してある新島から宰平に送った手紙からも、その様子はうかがわれます。

その新島の妻八重と宰平に面識があったことは、八重が晩年、新島襄との思い出を語った回想録の中で、宰平について語っていることからわかります。明治二十一年(一八八八)の十二月から翌年三月まで、新島が、寒い京都を避けて神戸諏訪山の和楽園に病氣療養していたところのお話です。宰平の人格がうかがえるエピソードですので、その部分をご紹介します。

なお、当時広瀬家は、同じ諏訪山に別邸を構えていました。

*

アメリカから帰ってから、それは襄が死ぬ前の年の、明治二十一年でしたが、神戸の和楽園という僻地に参って居りました。

他に何も慰めがなかったので、縁のところで、空気銃で的を打って、数取りなどをして遊んでいましたが、数取りでは、何時も私が勝って居りました。

或る日、広瀬宰平という人が見舞に来ました。この人はよく気のつく親切な人でしたが、
襄に

「新島さん、あなたはここに何のために来ておいでなのか」

と尋ねられましたので、襄は

「病気の保養に來ているのです」

と不審そうに答えますと、広瀬さんは傍にあつた、幅が一尺、長さが一尺三、四寸の行李の蓋いっぱいに盛り上げられた手紙を指して

「病気の保養に來て、こんな風では、とうていよくなる筈はない」

と言われました。

広瀬さんが或る晩、私達を慰めるために、自宅の晚餐に招待されましたが、行つてみると、私達にだけ洋食のご馳走を並べて、ご主人は席に出てきません。私は奇妙なことがあるものだと思つて居りますと、隣の室にみすを降して、真暗にした中から三味線の音が鳴り出したかと思うと、ご主人の浄瑠璃の聲が聞えて來ました。それはご主人のお得意な「阿波の鳴戸」で、太へんお上手でしたので、襄は涙を流して感心しました。襄が浄瑠璃を聞いたのは、これがはじめのおわりでした。

襄が十六、七の頃、東京に居りました時に、両国の橋の附近に、浄瑠璃や祭文がたくさんありました。襄は一ぺん聞いて見ようと思つて、葦をめぐらした小屋に、十六文を出してはいりました。椅子に腰かけて両刀を腰から外し、はじまるのを待つて居りますと、や

がて拍子木が鳴つてみすが上ると、顔を真白に塗った女が、見台を前にしてお辞儀をしていました。綺麗な女だと思つて見ているうちに、女が浄瑠璃を語り出すと、真白な喉がぶうとふくれて、不可思議な声を發したので、あまりのおかしさに思わず大声で笑いましたら、隣の人が「やかましい」と怒りつけましたので、あわてゝ刀を持つて逃げ出しました。それ以來

「浄瑠璃はうなるものだ」とばかり思つていたが、広瀬さんの浄瑠璃は非常に面白い」

とこの話をしました。私もこの話は、この時はじめて聞いたものでした。

長澤嘉巳男編『新島八重子回想録』同志社大学出版部（昭和四八年、平成二四復刊）より

*

なお、当館に展示してある、新島襄から広瀬宰平にあてた手紙は、このお話の少し後のもので、明治二十二年五月、アメリカ・ヨーロッパ旅行に出発する広瀬夫妻を見送りに行けなかったことを詫びたものです。

広瀬夫妻が欧米巡遊に出ることを知った新島は、事前に宰平に日程を問い合わせ、京都駅まで見送りにいく予定を立てていました。しかし、当日新島は、同志社の卒業生たちと記念写真を撮るために雨の中に立ち続け、靴を濡らしてしまします。体調のすぐれない新島は、不本意ながら